主題

副題

Title

Sub Title

○氏名１（所属）\*1　　　氏名２（所属）\*2

\*1 Name, Affiliation, Address, Zip code, e-mail

\*2 Name, Affiliation, Address, Zip code, e-mail

キーワード:キーワード１,キーワード２,キーワード３

1. 緒　　言

　講演原稿は原則としてA4判1～8枚で作成する．余白は上下20mm，左右15mmとし，本文は2段組みで，1段あたり55行，26文字程度を目安とする．文字の大きさは主題15pt，副題・英文主題・英文副題12pt，章見出し10ptとし，その他は9ptとする．字体は原則として各種見出しをゴシック，和文を明朝，英文をTimesとし，記号等に関しては適宜Symbolを使用する．文章の区切りには全角の読点（，）と句点（．）を用いる．キーワードは3～5個程度．その他，細かい書式等に関しては原稿内で統一されていればよい．

2. 見出しの書き方

　章見出しは2行分をとって行の中ほどに書き，次行から本文を書きはじめる．

2.1. 節見出し

　節見出しは1行分をとって左寄せで書き，次行から本文を書きはじめる．

2.1.1. 項見出し　　項見出しは1行分をとって左寄せで書き，2文字空白を空けて本文を書きはじめる．

3. 図表の作成

Fig.1 Title Title Title Title Title

（1）本文中では，図1，表1のように日本語で書く．写真は図として扱う．

（2）題目は，図についてはその下に，表についてはその上に書く．

（3）本文と，図表の間は1行以上の空白を空けて，見やすくする．

（4）図表中の説明及び題目はすべて英語で書く（最初の文字は大文字とする）ことを原則とする．

（5）図表がl段（片側）に収まらない場合2段（両側）にまたがって書くことができる．

（6）図表の横に空白ができても，その空白部には本文を記入してはならない．

4. 数式の書き方

　式番号は，式と同じ行に右寄せして（）の中に書く．また，本文で式を引用するときは，式（1）のように書く．

　式を書くときは，2文字分空白を空ける．また，必要行数分を必ず使うようにして書く．3行必要とする式を2行につめて書いたり，2行に分かれる式を1行に収めたりしない．なお，本文と式，式相互間は1行以上の空白を空けて見やすくする．

　また，原則として数式のフォントサイズは本文に準ずるものとするが，添え字等が小さく読みにくくなるときは適宜拡大する．

（1）

5. 引用文献の書き方

　本文中の引用箇所には，右肩に小括弧をつけて，通し番号を付ける．例えば，新宿・渋谷(1)～(3)のようにする．引用文献は，論文の場合，著者名・タイトル・雑誌/概要集名・巻・号・年度・頁，書籍の場合，著者名・書名・出版社名・年度のように記述し，本文末尾に番号順にまとめて書く．

6. 結　　言

　本テンプレートは絶対的な仕上がりのレベルを保証するものではない．印刷環境等に応じて適宜調整を行うこと．

文　　献

(1) Mokhtarian, F. and Mackworth, A. K.: Scale-Based Description and Recognition of Planar Curves and Two-Dimensional Shapes，IEEE Transactions on Pattern Analysis and Machine Intelligence，Vol. 8，No. 1，34-43, 1986.

(2) Sato, K. and Matsuoka, Y.: Self-organizing System for Deriving Diverse Solutions Based on Concept of Emergence, Proceedings of IEEE International Conference on Computational Intelligence and Cybernetics 2012 (2012), 11-15.

(3) Polanyi, M.: The Tacit Dimension，Routledge & Kegan Paul Ltd., 1966.

(4) Cabinet Office, Government of Japan:
http://www.cao.go.jp/index-e.html (Accessed 2 November 2016)

(5) 岩井正二，青木弘行：工業デザインのための材料知識，日刊工業新聞社，160－197，2008．

(6) 田村良一，他：デザインプロジェクトの戦略的な遂行方法の提案，デザイン学研究，Vol.62，No.6，95-104，2016．

(7) 佐藤浩一郎，松岡由幸：デザイン統合に向けたデザイン科学の基盤構築－「デザイン科学事典」編纂，日本デザイン学会 第61回研究発表大会(2014)，DOI：10.11247/jssd.61.0\_41．

(8) 内閣府：国民生活に関する世論調査：
http://survey.gov-online.go.jp/h26/h26-life/zh/z35.html (参照日 2016年10月19日)